アクイタニアのプロスペル～ルフィススペの手紙 恩恵と自由意志について

序章 私は二つの書類の言葉であなたがあちゃあ話をかみ砕き改たれるよう外を慣しまなかった

根拠なき恩恵を都者起こすためにわれわれについて繰り返し言われたことを、あなたは私自身から知ることができよう

しかし、始めに貴下はそれらの中傷が生じた問題の性質を知ろ必要がある。

これによって、矛盾を語る者たちの心偽がみなたにいっそう明らかになろう。いかなる光明もかの公開によって国敵しようとしているのを見ることになるであろう

第一章 パラギウス派の異端は、あまりにより知られていて説明の必要がないほどである。とはいえ、この教説にはたぶーつ、他の主張の中で最も悪しき微妙な種子となる主張がある

ペラギウス派は自分の行為に関して自由であるとする。

その主張は「神の恩恵は人間の功績に応じて与えられる」というものである

彼らは、人間の自然本性の健全性を行き立てようと望んだので、ただ自由意志(liberum arbitrium)のみによって神の国に到達することができるとされたのである

意志の行為は善と悪のいずれの方に向けても自由であることなのです。善人は善への能力に欠けているのではなく、その熟意が欠けているだけであると、彼らは主張する

その理由は、人間は自分の状態の保護をものにのこしてナ分現ちられて、自然本性的な仕方で理に到した。知性をもちつつ、善を選び避けることが容易にできることにある

彼らは人間の義全体が自然本性的な正しさや能力によって成立することを望んだ

このような見識を真である教義は拒否した

ペラギウス派はアウグスティヌスの原罪を認めない

第二章 しかし、彼らがそのように表明するとき、その欺瞞を露にした。彼らも恩寵によって生きているのだ、そのためというこの次元のものの中のためというこの次元で、理解され易もに捉し捉えられたからである

彼らは、カトリック信者によって非難されたこのような考え、異端の欺瞞に満ちた手法で恐づけし、そこから、人間が善をなる知に、それを開始し推進したゆまず続けるのに神の恩恵は必要不可欠であるとは言しなかりたし、あの考えを自分たちの手元に保持した

この恩恵に対する共通した普遍的な熟意が世界中のすべての人々に あるのです、求める者は信じ、信じるものは信仰と善き意志の功績(meritumve)によって義化を受け取るのである

第三章 しかし、この投稿を、東方の司教たちの判断(dispositio)教会会議：415)が、使徒の座の権威(教皇ノンティス)が、またアフリカの会議の賢戒の決議たちと、意を祝福されたアウグスティヌスもまた数々の書物の多くの議論において この投稿を行ち続いた

Dispositio Thebes(Egypt)を言うのであるが、Dispositio 教会会議がどのようなものであったか資料に乏しく、また、この頃、教皇はインノケンティウス1世でアフリックのローマ使徒(410)に属する

もはや論議 敬対者を嬉小化する手法である

以上の点は、すなわち恩恵そのものの召し(vocatio)が、初めにわれわれに働きかけてわれわれの魂の自由を動如促すようにするからである

そして、恩恵とは律法以外の何ものでもなく、また預言者や教師以外の何ものでもないからである

なぜなら、もしも恩恵が功績に遡元されるならば、そして恩恵自体が善者行いを通じ出すものであるならば、恩恵という名称は無為に付与されていることになるからである

彼らは、自分たちのことを聞き入れる都合の悪い言葉をつ入々を見つけると、ペラギウス派の誤謬が放聖されているアウグスティヌスの言物を非難する

そのとき彼らはこう言う。アウグスティヌスは自由意志を完全に認め、恩恵の名の下に運命的なが然性(necessitas fatalis)を唱えた、と。さらに彼らはこう付け加える。アウグスティヌスは、人間には二種類の之魂があり、それが二つの本性と捉えられる、と主張ムて、

もしも、われわれが正当に非難されるとするならば、なぜ告発を受けないのだろう、もしも、われわれが非難されるべきでないならば、なぜ聞れた中傷で侮辱されるのだろう

こうして、そのようなことに対して、異教やマニ教の不敬成が帰切られることになるのである

もしもこれが真実ならば、なぜ彼らは、それは之法外な秘減を敵から盗い出そうとせず、それどころの不健全な教説に抵抗しようとせず、かつ、教説を溢れさせた人とかんちゃの書物によって和解しようとしなかったのか

もしも、われわれが正当に非難されるとするならば、なぜ告発を受けないのだろう、もしも、われわれが非難されるべきでないならば、なぜ聞れた中傷で侮辱されるのだろう

第四章 しかし、彼らが私的に、はそのような仕方で、公的には慎重になって熟り込む理由をたずねられるのだろう

彼らは、自分たちが多くの説話(collationes)で述べた様々な種類の人に反対して主張したことに対してわれわれが反論する、ということに慎賢するからである

それは彼らが、同類の集団や教師の集会のなこ下の、ことに、ことに関して問題を発議したならば、アウグスティヌスの百巻もの著書がかなこ下の自分たちの前に立ちはだかることになろうということを半分おかっているのである

第五章 以上のような考えを彼らは聖書のああ一節を証拠にして主張しているが、その一節は理に適り仕方では取り上げられていない

彼らはこの一節を、確かな ものであるこの世の生の中で疲れ、罪によって重荷を負うすべての人間に対して言っている

彼らはこの言葉を自由意志を肯定する意味に語られたものとして言う。「疲れたもの、重荷を負う者は、誰でも私の許に来なさい、あなたがたを休ませてあげよう。私は柔和で謙虚な者だから、私の軛を負い、私に学びなさい、そうすればあなたがたは安らぎを得られるであろう。私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである」マタ11:28-30

あるはそれらを恩恵の賞賛に由来したのだが、それでも善行いの善意恵まのなんらかの功績が先行することに対して生起したのだと考えるとき

善恵を用いる者に対して、その一部は理に適った仕方で取り上げられている

しかし、彼らは次の言葉を、自由意志を肯定する意味によって語られたものとして聞くがよい

そのような場合、召し給う方の勧め励まして自由意志が従うことを望まれるようにのだろう

もしも神が人の内に働いて、その結果神が意志することを与え給うたことのその対象に対して、さらに行うことをもちえたのであれば、いったいどのような御心のまえに、というのであろか

第六章 さらに彼らは自由意志の能力を証明するために、百卒長コルネリウスの場合に証拠があると主張する

彼は恩恵を受ける以前、「神を畏れ、神に祈り、自発的な慈恵(spontaneum studium)でもって「施し」を、貧民、祈りに専念していた」が、彼はこのゆえに聖霊によって救聖されている、とされて新生の開物を授かったのだから、とする

彼らは、コルネリウスのあの 準備の全体が神の恩恵によって与えられていたということを理解していないのである

聖ペトロが、コルネリウスに洗礼を授けることについて、あらゆる種族の諸国民に対によって教えられた、彼がユダヤの慣例に従って、清められず穢別されていない食べ物を拒んだことに、彼に向かって三度の声がして次のように言った、「神が浄めたものを清くないなどと、あなたは言ってはならない」

このことによって、コルネリウスにおいて先行していたすべての善き行いは、神の恩恵にもとづいて始まっていたことを理解していないのである

その結果、主がすでにこのような賜物を授けたことに秘訣を与えるのを、使徒はまったく疑わなかったのである

それは、もしも引き受けられるべきものには神の迷行の支えに、先行する恩恵があるということ？

しかしながら、コルネリウスにおいて先行していたすべての善き行いは、神の恩恵にもとづいて始まっていたとする者たちは、ペトロの言葉に耳を傾けようとはしないのである

「あなたがたは、恩恵により、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるのではありません。それは、誰も誇ることのないためです」エフェ2:8-9

信仰をもつ者は神の国によって導かれるが、信仰をもたぬ者は自由意志によって罪囚である

しかして、われわれ神への回心はわれわれに為、実するのではなく、神に由来するのである。使徒が次のように言うように

「あなたがたは、恩恵によって救われたのである。」

信仰をもつ者ともたぬ者は外面的に判断できないのです。神による賜物以外に救われない、とする考えに至っている。キリスト使徒は、

最後の審判の後の召し出 予め決定されていると述べているのに、異邦人が福音に触れることができるのだろうか、神の予定であるとしている

神の予定に段階があることになる。

一段目：福音に触れるのだろう

二段目：信仰に入るのだろう

三段目：永遠の生命に向かって召し出されるのだろう

アダムの原罪が世代間で継承されるというのは、人間の肉体はどの本性上より劣っている別の力が継承されるのだろうか

また、死者が生命を送り、盲者が光を受け、不義なる者が義とされるように、

そして、イエス・キリストは彼らの生命であり、光であり、義であると自白せよ

第七章 人間の絶弱さをして自らを知らしめよ、そして初めの人間について、その世代の継承をして自らを断罪されたのちとして知らしめよ

実際、彼は正しく行ったのであるから、彼は常に高められるのでもなかりし

神に向かって歩むことが あって初から後に彼の道路が確かにされるのでもないし

また神を愛したことがあるであろう彼に彼の慈愛が欠点されるのでもない

むしろ、彼が信仰なくして、その上不義であったとき、信仰の恵を受け取って、それで正しい者となるのである

予定論を肯定した上で、アウグスティスの個人的経験が予定に対した異上で唯一のものと考えているのか

第八章 確かに、自然本性的な罪源のなさはそれわれのて、人間は故意は直接し、深く調課へと入っていった、しかし、人間が捉ま求められ、見出され、真理であり生命であるところの源に連さ入られれ、そこで、まだ神を愛していない人間を初めから愛していた神、その神に向けての愛によって、人間は然え立たされる

すなわち、「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛した」さ、さらに、彼は言う、「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」

この信仰が愛(charitas)に結びつけられて考えられる源は、使徒が次のように示す通り、愛を受け取る源にほかならない

すなわち、「つまり、あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しんでも、恵みとして与えられているのです」

ここには大いなる愛がくして は起こり得ないからである

一見、これまでの教説と同じであるが、聖霊が先決により与えられるものであり、別途、神から神の恵恵で与えられると考え来

このような愛なくしては、どれほどの信仰を、いくらの知識、どれほどの力を、どれほどの熱意を、どれほどの労苦を、何の益もない

なぜなら、確かに人間には多くの称賛すべき事柄が見出されるが、それらの事柄は愛の神秘もなしにならは は敬虔に似たものをもっていても、それでも真なるものではない。

第九章 したがって、誰もはるかに先だって語られた召し給あ善きものに優る者として見出されない、見れば、誰でも神によって選ばれた者は、それに優する者となる

なぜなら、確かに、人間には、すべてのものの中で、善きものを選ぶことができるであろう

神の恵恵が義とするところの人は誰でもより善き者へとつづけなければならない。

ただし、その聞自由意志が神なくして義抵にいるのかがいずれは選に対して、かえってそれが自由にされるのである

というのも、自由意志が神なくして義抵にいるのかがいずれは選に対して死に、罪に対して生きているからである

自由意志は自己に対して生きているだけであるからという説明

自由意志は自己に対して生きているだけであるからという説明

自由意志は自己に対して生きているだけであるからという説明

第十章 聖ペトロ自身の信仰でさえ、もしまがの後のために祈ることがなかったなら、誘惑にあいこの信仰を失ってしまうであろう

このような状態にとどまるためには、もしも自由意志が熱意を受け取ったその源から恵恵をも受け取るのでなければ、自由意志はいったいどこから、どこに、どのようにしてこの恵恵を受け取ったのであろうか

このような状態にとどまるためには、もしも自由意志が熱意を受け取ったその源から恵恵をも受け取るのでなければ、自由意志はいったいどこから、どこに、どのようにしてこの恵恵を受け取ったのであろうか

このことは、彼が将来信仰において義なるものとなっているであろうことは外のっていたからである

しかし、彼は、自分で不義なる人々のなかにあるかぎり、自由意志によって立っていると思われないために、彼は拡されに任せられたのである

この結果、主は、狼狽し衰え果てた彼を再び獣虜しつつ連れたのである

第十一章 しかしながら、あるいは、ある人はこのようなことを言われるかもしれない。神の恵恵の告白から選ばれている

神の恵恵を将来告白した場合、全世紀を通じて生まれた人間の全数のなかから、永遠の生命に向かって予定された人々の数が、神の下で確定され限定され、召し給う神の意図に従って選ばれることを心砂然に告白することができることになる、ということである

しかし、恵恵そのものに反対するのと同様に、このことを否認することは不義なることである

というのも、どれほど多くの世紀にわたって、どれほど数え切れぬ多くの、自らの過ちと不敬虔に放任された人々が神のいかなる真実をもあることなく尽き果てていったかのようには、誰が見ても明らかだからである

尽き果てていた人々は主復活していないが、神により救われていない人々の数とはなり得ない

むさ出しの予定論である

ちょうど「使徒言行録」においてリカオニアの人々に言ったパとパウロの言葉がそれを示すように

異端異教者が神の賜物によって生きているのは使われていない状態であることを説明したいのだろか

すなわち、「神は過ぎ去った時代には、すべての国々の人間に思いの通を行くままにしておかれましたし、しかし、自分のことを証しムいていたわけではありません。恵みを下さり、天から雨を降らせて実りの季節を与え、食物を飽して、あなたがたの心を満たすことのないようにしているのです」

確かに、彼らにとって、あるいは自然本性的な知性が、あるいは神の恵恵(beneficia)の使用が永遠の生命をしっかり摑むために十分であればならば、われわれの時代においても、理に適う魅惑や気候の柔和さや果実と食物の豊かさがわれわれを救っていたことになろう

なぜなら、われわれは明らかに自然をより善く使用しつつ、主の日々の賜物(dona)のためにわれわれの創造主を崇拝するのである

第十二章 しかし、このようなものて悪かで有害な見解は、聖恵の賜物の中でキリストの血により救済されると者ちの誠からの逸脱れ去れるのである

「われわれを通られたのは主であって、われわれではないように、そのようにわれわれを通り潤すのは主であって、われわれではない

生まれてすぐに再び生を受けて、この世から引き離されて永遠の至福へと定められる幼児について

これらの幼児たちは、神の賜物によって、神は洗礼の前であれ後であれ、何ひとつ与えられていない、と言う。

この幼児たちについては、神の国にいかなる関係もなく、もたないことを言と疑うことができないのである

人間の自然本性を自由にするのは、聖人たちのあいだの仲介者、人であるイエス・キリストただおひとりしかにはいないである

人間の能力が最の行い によってかある準備の代償を一度なりとも自分の回復の後で一神に返すというように見える ことのないように

第十三章 その意味を理解しない者たちからいうもわれわれに対して反論のあるものなのを出して異議を唱えるのである「神は、すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられますはどうであろか

過去の世代に現在に至るまで神を知ることなく滅びた「すべての人々」についてのものではないのであろか

神の善の意様が、ある幼児の最初の時期そのものに関 れ注ぎ込んだのである

洗礼直後に亡くなった新生児を選ばれた者、洗礼を受けずに亡くなった幼児を選ばれなかった者として、予定論の題形を提 示しているのである

自由意志によって犯した悪しき行いが、自然本性の健全性を損なわれ、救われた状態と救われなかった状態との真いだには、いかなる功績の区別があるというのであろうか

誰も功績に関わりなく滅ぼされない、誰も功績に応じて自由にされるのである

「すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられる」テモ2:4 ところがすべての人々を主の義名を信じる者たちが救われ、まったくのような人々を真理の認識へと導くのであるである

あなたが功績のことを考慮するならば、一方の部類だけが救済に値するのではなく、異者とも新罪されるに値するのである

第十四章 したがって、使徒たちが異邦人に福音を説教し始めるとき、聖書は、説教を聞いた人々のなかの一部の人について言及し、次のように言う、「異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められていた人は皆、信仰に入った」

すべての人はアダムが罪に陥ることにおいて打ち倒されているから、もしも、憐れみ深い恵恵の為よりを一度上げなかったら、非難の余地なくすべての人々の上にとどまったであろう

さらに、福音の説教がすべての異邦人に向けて放たれていたちょうどそのとき、「すべての人々が救われて真理を知るようになることを望んでおられる神」によって、ある種所に行くことを妨げられた。もちろん、多くの人が、この福音の連れのあいだに引き留められ連ざかり、異端をおこさなく新生の聖化もなく死んでいったことだろう。

しかし、神の隠れた計画に対する、これらの区別や根拠がどのようなものであるかを、他方で別の異邦人は、人間の認識の能力を超えていない。まったくそれを知らないまま、信仰の衰弱を招くものではない

「さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通っていった。ミシア地方の近くまで行き、ビティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。そこで、もしも、福音の説教の末に、始まりあるいで、神の霊が使徒に行って従いしかと望んだ場所以外の所に使徒たちを行くことができなかったとしたら、なんと驚くべきことであろうか

なぜなら、われわれは、一方できわめて多くの異邦人がいまやわれわれとキリストの恵恵に与り始めたのを見るからである。

第十五章 あるいは、人間の意志というものは神の意志に対抗し、そしてかから人間の性質は、その不敬虔さ心が説教に対して聞かれていないゆゆえに福音を聞かないはどと野蛮で剛しがたいものであると言わなければならないであろうか

しかし、そのような心を、「一つつ彼らのいっを語る方」でなければ誰が変えるのであろうか。そのような福音が硬直さを、その方でなければ、誰が従順なゆめ悪へと柔らかくするのであろうか

そして、説教する者たちに対して、恐れるな、どパロに語るのか方でなければ、誰が恐れなく強づけられないで不屈のことを与えることになるのであろうか

「永遠の命を得るように定められていた人は皆」信仰するであろう

したがって、まだ福音を聞いていなかったいかなる国々も、福音を聞くことになるであろう。「永遠の命を得るように定められていた人は皆」信仰するであろう

実際、主が自らの召しの言葉を主の望む限り聞し、先に証拠し、望んだときに語りかけるであれば、そしてこれら未知ないこと が聖徒たちに害をもたらさないとするならば、

いかなる数のいかなる人々に情れれの器が栄光へと準備されるのかということが問題されている場合にわれわれの希望が於げられる、と、どうしてわれわれが考えることがあろか

確かに、この聞自意志がただそれだけで自らに任されていたとき、それはただ破滅へと動かされていただけであった

というのも、それは自らをまったく盲目にしてしまい、盲目自身を抑らすことしかなかったからである

しかし、自分によって善なるものであり、神によって善なるものである

しかし、自分によって善なるものであり、神によって善なるものである

しかし、いまや、この同じ自意志は回心し、転倒することがない

それに、この自意志は、さまざまに意志し、さまざまに行為し、自分の意のいかなる部分を自身にではなくその神に捧げ、ということが、ここでは、明らかとなった。

しかし、この自意志は、さまざまに意志し、さまざまに行為し、自分の意のいかなる部分を自身にではなくその神に捧げ、ということが、ここでは、明らかとなった。

しかし、今、この自意志は、さまざまに意志し、さまざまに行為し、自分の意のいかなる部分を自身にではなくその神に捧げ、ということが、ここでは、明らかとなった。

自由意志は神に捧げられるのである。

自由意志は神に捧げられるのである。

自由意志は神に捧げられるのである